

瀕死の日記

二〇一二年七月

春卷

七月一日（日）

例の大地震の夢を見た。

カクがカクサンする現代では、

リアルが希薄な現代では、

せんそーもこんな風にして始まるのかもしれない、と夢の中で思った。

死ぬのかな、こういう死に方なら、親も責めないよな、とも思った。

七月二日（月）

マンションの一室にいる間、突然、誰もが蒸発してしまうという夢を見た。私はラジオの選局ダイヤルを回し、生存者の存在を懸命に探した。情けないくらいに怖かった。

七月三日（火）

夕方、足の悪い男が、神保町駅の長大な階段を、必死の形相で降りていた。

私は共栄堂のカレーを食べた後だった。

ベローチエのコーヒージェリーを食べた後だった。

さぼうるのコーヒーを飲んだ後だった。

私は彼から目をそらし、楽々と追い越していった。

七月四日（水）

私は人の死は望まない。

木村東麻呂。

山田晃也。

小網健智。

森山進。

七月五日（木）

数十億年後、太陽は膨張し、地球を飲み込む。

宇宙の研究者を駆り立てるのは、自らの死への恐怖のすり替えだ。
全人類の死という欲望だ。

そして、全宇宙の生命の、徹底的な死への甘美な夢想だ。

七月六日（金）

多くの思春期の子供たちは瀕死だ。
スマホにしがみついている。
応援しなげや。

七月七日（土）

明日、みんなの願いを描いた笹たちは、ただのゴミになる。

その前に、笹のことなどみんな忘れている。

多くの子供たちにとって、願いとは、願ったらその時点で終わりなのだ。
ドリルと一緒に。

七月八日（日）

梅雨明けも近い。

今年も無数の老人たちが熱中症で死ぬのだろう。

毎年。

毎年。

七月九日（月）

シラスを腐らせてしまった。

お前達は何のために生まれてきたのか？

申し訳ない。

本当に申し訳ない。

七月十日（火）

朝、昼、夜の葉を寝る前にまとめ飲み。

心の中で、商店街のくす玉が割れる。

がらんがらん、と鳴り物の音。

「お客さん、おめでとうございます！」

やったー、葉が一年分だー。

七月十一日（水）

レイ・ハラカミを聴くと泣きたくなる。

ずるい、とも思ってしまう。

彼はいた。

しかし、彼の実体はこの世にはもうない。

かなりうらやましい。

七月十二日（木）

エイフエックス・ツインはいつも元気だ。

ずんずんどんどんずんずん。

早世した兄の分まで。

死は時に生以上の生だ。

七月十三日（金）

紫陽花は青で打ち止めで、あとは白く、黄色く、枯れてゆく。

それは花のようなもの。

でも、本物の花ではないので、いつまでも醜態をさらしたままだ。

花のように散れないのだ。我々のように。

かわいそうに。

七月十四日（土）

「モムチャン・ダイエット」の作者、チョン・ダヨン。
彼女の名を日本人が口にしたら差別になるのだろうか？

悪意があれば、なるだろう。

あるいは、悪意をもたれば。

七月十五日（日）

今年はオリンピックがあるということを知った。
本当のことだ。

うちにはテレビも新聞もないからだ。

そんな私は、多分、オリンピックを一分も見ない。

ニッポン！ ニッポン！

七月十六日（月）

リラックマとこまねこはよく似ている。
……くそつ。

七月十七日（火）

梅雨が明けたらしい。

夏だ。

陰気な私も、熊谷のあつべえのようになれたなら。

七月十八日（水）

夜の公園で強い腐臭がした。

死体？

まあ、自然にとつては生ゴミも死体も同じものなのだろうが。

臆病な私は家路を急いだ。

七月十九日（木）

出し抜けに子供が現れて、私は子供に挨拶ができなかった。
子供は逃げていった。
怖かっただろう。
死にたい。

七月二十日（金）

「いいね！」は本当に流行っているのだろうか。

何が「いいね！」だ、馬鹿じゃないの、と私は思ってしまう。

ザツカーバーグは薄っぺらなワस्प野郎にしか見えないし。

だがしかし、私の周囲にザツカーバーグしかいなくなってしまったら、

私はいよいよ死ななければならない。

七月二十一日（土）

「家族団らん」という言葉が怖い。

寺内貫太郎は恐怖の代名詞だ。

本当にそういうものがあるとするなら、ますます怖い。

根底からの今の自分の否定。

それに第一、死ねないじゃないか。

七月二十二日（日）

珍しく朝早くに目が覚めた。

ラジオ体操の懐かしい音楽が聞こえてきた。

私はすぐく幸せな気分になった。

どこか近くで、たくさんの子供たちが、ふざけながら体操をしているのだ。
まっさらなスタンプカードをぶら下げて。

七月二十三日（月）

なんだか今日は子供の姿を多く見かける。

しばらくして、小学校は今日から夏休みなんだ、と気付いた。

それにしても、子供はどうしてこうも小さいのだろうか？

だっこされるため？

七月二十四日（火）

ここ数十年くらい、だれもおんぶしたことがないことにふと気付いた。
誰かおんぶしたいなあ。

そう思つて歩いていると、

「おんぶ屋く好きなおんぶして下さい」
という看板があつた（嘘）。

七月二十五日（水）

給料日。

だから何だ。

しかし、スペインの失業率は二五%もあるらしい。
もらえるだけ、ありがたい。

飢え死は辛そうなので、ちよつと勘弁。

七月二十六日（木）

とにかく、つる。

寝ている時に、あしがつる。

トイレで、腹筋がつる。

扇風機の風で、首筋がつる。

とにかく、どっかーん、とつる。

七月二十七日（金）

誰かが死のうとしていたら、私は死んでも止めてみせる。
刃物を振り回す者がいたら、私は刃を体で受け止めてみせる。
これで親は納得するだろうか？

七月二十八日（土）

死に取り憑かれた私は、タブーを言う。

見知らぬ男性の知的障害者は怖い。

見知らぬ男性の自閉症患者は怖い。

だがそれよりも、心の通じないことは何よりも怖い。

七月二十九日（日）

散歩したら汗だくになった。

ハンドタオルが用をなさない。

自分で自分が臭かった。

野良猫のような臭いがした。

私は未だ生きている、あーあ、と思った。

七月三十日（月）

会社をずる休みして、美容院に行った。

お休みですか、と訊かれたので

はい、とだけ答えた。

まるで何かに勝利したように、とても気分がよかった。

七月三十一日（火）

さようなら、何もなかった、私の七月！